

ている。年表の解説の形で幕末には宇和島の医学史との接点を書き入れてある。

その他、宇和島藩の表題であるが、文化交流の多かった近隣の大洲藩、吉田藩の医師についても言及している。また時代的に幕末に止まらず明治初期の宇和島藩の医療事情を述べ、日本の医学が漢方医学→蘭方医学→ドイツ医学へと接続する経過を郷土史的に明らかにした。明治期に日本医学会で活躍した八島星海、谷口長雄について記述した。

執筆者の清水英先生は多忙な内科開業医を続けながら、資料の整理、編集、校正等を殆んど一人で仕上げられたばかりでなく、特に藩医の墓石調査の為、宇和四郡の数十戸の寺をめぐり、今まで所在不明の六名の墓所を発見するなど、本書の完成までに傾注された努力は、全く敬服のほかはない。

(宇和島市医師会 萩山 正治)

(本書を)希望の方は宇和島市医師会宛に直接申し込んで下されば、定価千円(消費税なし)で購入出来ます。残四百部、四六判、二四六頁、平成十年七月刊)

松木明知編著

『中川五郎治書誌』

わが国への牛痘接種法の伝来には、松前地方に移入された北方系と、長崎に移植された南方系の二系統があることはよく知られている。北方系種痘をつたえたのが中川五郎治であり、それは南方系に先立つこと二五年ほど早い時期であった。

その中川五郎治について、著者は医学部の学生時代から研究に取り組みはじめ、その方面の研究の第一人者であった阿部龍夫氏から関連資料を恵与されるとともに、数々の教示と激励をうけながら、以来三十七年にわたって鋭意研究をつづけて、おおくの新知見をえている。この間に自らが収集した五郎治に関する基本的史料をはじめ、他のおおくの著者たちの論文をまとめたのが本書である。

著者は先年「中川五郎治研究文献目録」と題して『北海道医事文化史料集成』上巻に、七四篇の論考をまとめて収録した。そのさい「編者未見の文献も、これ以外に少なくないかと思われるが、後日の完璧を期して一応未定稿としておく」と後日の完成に望みを託していた。その後の研究においてさらにおおくの史料を収集することに成功し、念願がかなって今回のこの編著には阿部龍夫氏をはじめとする七二名と、北海道医師会など五機関の手による一三八篇の論文が収録されている。これによって著者がいう「中川五郎治に興味を持った人がさらなる研究を行うため、資料や研究文献を求める際の便を企てるためである」(はじめに)という目的は十分はたされるものと思う。今後は本書を参考にしない中川五郎治の研究はありえない。

本書の構成をみれば理解できるように、これは五郎治の単なる文献集ではない。著者名、書名あるいは論文名、発表誌名あるいは発行所名をあげるだけでなく、ほんの二、三行ではあっても、かならず適切な評価が書きくわえられている。